

遣唐使

630 年から 838 年にかけて、日本の朝廷は当時東アジアで最も進んだ文明を持つ唐に 19 の使節団を派遣した。遣唐使は外交・通商関係を深めるだけでなく、中国の政治・経済・文化・宗教を学ぶ役割を担っていた。彼らが持ち帰った知識は、土地や行政の改革、人口統計の作成、さらには唐の首都・長安をモデルにした平城京や平安京の配置などの基礎となった。

804 年に派遣された遣唐使団には、最澄（767-822）と空海（774-835）という日本史上最も重要な仏師の二人が含まれている。彼らは中国での学習と経験から、それぞれ天台宗と真言宗を設立し、何世紀にもわたって日本の哲学、美学、宗教思想と実践に大きな影響を与えるようになった。

遣唐使は 4 隻の船で、数百人の外交官、学者、芸術家、貿易商を乗せた使節団で構成されていた。当初は壱岐、対馬を経て朝鮮半島沿岸を山東半島まで海路で移動し、そこで下船して長安への陸路の旅に出た。660 年代になると、この航路は廃止され、702 年から遣唐使船は五島から直接東シナ海を渡り、長江の河口から商都揚州に至る短いがはるかに危険なルートを取るようになった。

五島は使節団の最後の寄港地であり、そこで順風を待って大海原を渡ったのである。五島北部では青方、相可周辺に、南部では三井楽半島周辺に、遣唐使に関連する遺跡が多数存在する。